

第6回県政知事懇談

湯崎英彦の宝さがし

テーマ【挑戦そして実現！引き出せ広島県の「底力」】

と き 平成22年5月16日（日）

ところ 竹原市保健センター

広 島 県

目 次 頁

開 会	1
懇 談	2
自由討論	31
閉 会	38

(注) 了承を得られた方については、氏名等を公表しています。

開 会

(知事(湯崎))

それでは、始めたいと思います。皆さん、よろしく申し上げます。

まず、私から御挨拶をさせていただきたいと思います。

今日は貴重な日曜日にもかかわらず、お忙しいところ、こうやってお集まりいただきましてありがとうございます。また、傍聴の皆様も日曜日にこうやってお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。

この県政知事懇談というのは、県内の各市町 23 ございますけれども、私がつ一つ一つ回って、市民の方、住民の方と直接お話をさせていただいて、いろいろな課題や、あるいはいいものを探そうという会でございます。名前が宝さがしというふうになっていますので、最近はいいいことばかりお聞きする傾向が強くなっているのですけれども、実際には地域の実情というのはいいいこともあれば、あるいは困っていることもたくさんあると思います。そういったことをすべて含めて、何でもお伺いをしていくという趣旨でございます。そういう意味で何でも、普段思っていらっしゃることを率直におっしゃっていただきたいと思っています。

私は、今、広島県の五つの挑戦ということで、「人づくり」「新たな経済成長」「安心な暮らしづくり」「豊かな地域づくりと真の地域主権の確立」、最後は行政の話なのですが、「行政の刷新」ということを五つの挑戦として挙げてやっております。

これから少子高齢化という厳しい状況を迎える中で、いろいろな分野で挑戦をして新しいものを生んでいくことが必要だと思っています。そのベースになるのが、何もないところから始まるわけではなくて、それぞれの地域が持つ強みをベースにしていきたい。それを「宝」という言葉に置き換えて宝さがしと言っているのですけれども、当然その宝を磨いていくに当たってはいろいろな課題もあろうかと思っていますので、そういう意味で課題も含めてということになっております。

今回お伺いしたお話は、もちろん個々具体的に県政に反映していくものはあるかもしれませんが、むしろ私としてはいただいたいろいろな御意見を今は貯め込んでいるところでありまして、これからの4年間の政策のベース、よく味噌樽とかそんな言い方もするのですけれども、じっくり貯めて、発酵させていきたいと思っています。性急な結論を求めていくというよりは、じっくりと県内のいろいろな状況を理解していくことが重要であると、そのためのものであると位置付けております。

ちなみに、今日のような直接住民の方々との会合とは別に、市長、町長とお話をする機会も設けておりまして、これも1年の間に進めようとしております。こういった両方のお話を基に、これからの県政を組み立てたいと思っていますので、なにとぞよろしくお願いいたします。

傍聴の皆様にはこれから3時半までの約2時間ほどお付き合いをお願いいたしますけれども、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

懇 談

(知 事)

それでは、早速始めさせていただきます。テレビカメラなどあたりして、最初はやや緊張気味に始まるのがパターンなのですけれども、今日は実は初めて机を取り払いまして、かなり近いセッティングで試みております。少しリラックスした雰囲気を出すためでもあるのですけれども、御自由に御発言をお願いできればと思います。

では、私から見て右側の國兼さんからお願いします。

(國 兼)

荘野公民館館長の國兼千代美と申します。よろしく申し上げます。先ほど知事と握手をしまして、ちょっと力が出てきました。一番なので緊張していますけれども、よろしくお願い申し上げます。

地域の拠点として公民館を先輩から引き継ぎ、公民館本来の事業以外のかかわりの中で地域が少しずつ見えるようになりまして、課題や将来へのビジョンを考えるようになりました。

平成17年度世代間交流事業で写真集ふるさと荘野を作成したこと、また、小学生の夢実現プロジェクトを地域で立ち上げて、JR廃線跡でトロッコ列車を走らせた地域ぐるみの事業の経験などが人づくりとか地域づくりの出発点になりました。

現在、公民館で取り組んでいることは大きく四つあります。一つは、和太鼓で地域活性化を目指すということで、和太鼓は私のライフワークなので、10年以上かかりましたけれども、子ども太鼓、大人の太鼓チームを地域でつくりたいという夢が実現しました。平成20年に協働まちづくりで「太鼓フェスティバルIN荘野」というのを実現できて、荘野のオリジナル曲もつくって披露もできました。保育所とか小学校、中学校とか大人チームで共演したのですが、これでもう公民館を辞めてもいいぐらい満足したのですけれども、これを継続するための活動が待っていてまして、それを今、頑張っています。

二つ目は、今、公民館を利用している人の年齢の層を広げる活動です。今、人口が1,892人で745世帯の地域です。公民館の利用数が年間1万3,000人程度です。公民館利用の多くの方は女性で、高齢者の方が利用されています。かなり男性の方も利用するようになりましたが、まだまだ女性が多いです。昨年より男性の特に団塊の世代の層の活動を増やす取り組みを始めました。例としては、おじお婆バンド、おじさん、お婆さんのバンドチームです。どんど鼓荘野というのは太鼓チームです。10代から60代の年齢で、子どもの太鼓

育成養成講座的な思いも私の中ではありません。

三つ目は、地域の各団体と公民館事業を交流事業にしたい。人が集まるときは意識的に誰でもOKにしています。特にイベント、研修、講座を組むときは、高齢者、子どもと一緒に参加してもらうことに努力しています。学校との関係も日ごろよりいろいろ、絵本の読み語りボランティアに地域から週1回で入ったり、年に2回ぐらいは学校・地域で地域まるごとの事業を行ったりしています。事業をコーディネートすることで参加者が増えて、交流も深まり、楽しい地域の事業として根付くと思っています。

四番目は、竹原市も推進している協働まちづくりについてですが、3年目に入ります。1年目は太鼓フェスティバル、2年目は防災訓練、3年目ですけれども、今年あたりからおもしろくなるのではないかと期待しています。昔、青年団がやっていた芝居をやりたいとか、昨年環境部会という部で取り組んだ空き缶ポイ捨て禁止ポスターを募集しまして、それを活用して啓発の看板をつくるとか、人づくり交流部会では楽しいこと、人が集まりやすいことをするというので、寄席とか、公民館で歌声喫茶のようなことをやってみたいとか、そのような意見が出るようになって、地域全体をエリアに事業を進めることをしっかり学んでいます。今までにない、チャレンジできる地域力が生まれるかもしれないと期待しております。

それで、県に提案したいことは子ども事業の充実ということで、子どもたちが豊かな心をはぐくむ文化活動、体験活動に何らかの助成ということを提案したいと思います。子どもたちには心豊かに育ってほしい。青少年健全育成とか、みんな日本中の大人は思っていると思います。次世代を担う子どもたちが心豊かに育ってくれないと、将来が不安です。いろいろと国も、県も、市も、学校も、PTAも、地域も考えているし、努力もしていると思います。でも、時代とともに子どもたちを取り巻く状況は厳しくなって、ゆったりとした子ども時代を過ごせない。急がされて大人になっていくという現実があります。

何年か前に、国連から日本は人間として成長する条件がちゃんと保障されていない。人間になれない子どもたちが育っていると指摘されたことがあると何かで読んだのですが、とてもショックでした。そのときはいろいろと衝撃的な事件が多いころでした。ゆったりとした子ども時代にはなかなかならないかもしれないけれども、少しでもぶるっと心を震わせる体験活動を、生の舞台芸術とかをしっかりと提供したいという思いがだんだん膨れています。文化にはとてもお金がかかります。それを見たからといってすぐ結果は出ないし、子どもが急に優しくなったり、変わってくることも期待できないと思います。20年、30年たって子どもが親になって、そのときにちゃんと普通に子育てができたり、虐待とかせずに子どもを育てられたり、そういうことは少しは期待できると思っていますけれども、なかなか目に見えない。だけど大事なことだと思っています。目に見えないけど、ちゃんと心が育つことを提供しなければ、子ども時代が豊かにならない。教育とか医療とか福祉とか本当に大事なのですけれども、それと同じぐらい、そういう文化体験も少しでも多く

子どもたちに与えたいと思っている大人が少数はいると思いますけれども、たくさんはいないのです。文化などにお金をかけるより、塾とかに行って勉強させたいと。

(知 事)

そうですか。それは個々の保護者の方がということですか。

(國 兼)

そういう方のほうが多いと思います。でも、少数でもそういう文化的なことに、たくさん見てもらいたいという方がいらっしゃいます。文化でもいろいろありますけれども、大人は子どもたちに地域の郷土文化を伝えていたり、昔から伝わる食文化を教えたり、暮らしの中の文化を伝えていかなければいけないのです。それと同時に感動できるそういう機会を大人も子どもも必要だと思って、行政が企画する助成だけではなくて、PTAとか子ども会とかグループでできるようなそういうシステムになったらいいなと思います。子どもが集ったら、大人も高齢者も集うので、よい、すばらしい事業になると思います。ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございます。お話をお伺いしていると、随分たくさん活動されていて、毎日寝ていらっしゃらないのではないかというぐらい。

(國 兼)

寝ています。

(知 事)

大丈夫ですか。公民館の活動というのは、昔に比べるとだんだんと活発化しているという感じですか。

(國 兼)

そうですね。

(知 事)

それは公民館全体ですか。それとも、國兼さんが取り組んでおられて、その中でほかとは違った味が出ているという感じですか。

(國 兼)

それは地域の事業も全部、公民館ですることは全部同じと考えてやっているから、どの団体が主宰であろうと、公民館ですることは全部一緒に考えているから、人は重なっています。だから、仕事は増えますけれども、楽しみも増えます。

(知 事)

ちなみに、今おっしゃった文化というのは、今年から試みで始めているのですけれども、島体験・海体験といって、山の学校の子どもたちが島へ行って何日かその島での暮らしの体験をしてもらうとか、あるいはその逆をやったりとか、あと、去年、平山郁夫先生から寄付をいただいたので、それをベースに瀬戸内をテーマにした絵画教室というのをやることにしたり、幾つかそういう事業はやっています。もちろん、市が取り組んでおられるそういった文化に関連する事業もいろいろあると思うのですけれども、課題はやっぱりそういうものがなかなか広く、特に県の場合は県内全体でやるので知られていないということが結構あるのかという気もするのです。

(國 兼)

ありますね。せっかくいいものを選んでいても、すごく少人数で見るともったいないと思います。やっぱり広く。

(知 事)

そうですね。分かりました。ありがとうございます。

(國 兼)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは〇〇さん、お願いいたします。

(〇 〇)

竹原市内の企業に勤めています〇〇と申します。竹原市の商工会議所の企画された婚活のマリアージュというものに参加して、実行委員で活動させていただいています。

その御説明を簡単にさせていただきたいと思っております。

まず活動目的は、晩婚化と未婚化で少子化に歯止めがかからない状況になっている。若者が地域で交流する場、活動する場が少なく、まちづくりに参加する機会が持てない状況にある、とも思わないのですが、ありますということで、明るく絶えないまちであって

ほしいということで、出会いということでマリージュを企画したそうです。

今、会員数は100名ぐらいいます。実行委員は女性部の方を含めて19名で、会員の中から何名かやりたい人を抽出して、19名で活動しています。

実際、開催予定が立ったら何をしようかということで、楽しめるような企画運営を行っています。

一応実行委員なので、普通の参加された会員の方と接触する機会は時間的になくなるときもあってちょっとかなしいところはあるのですが。

(知 事)

その実行委員の皆さんは男女両方いらっしゃるわけではないのですか。

(○ ○)

老若男女問わず様々な方がおられます。

先月も11日にバーベキューをやったのですけれども、ちょうど小雨の降るいい天気だったので。

(知 事)

雨のバーベキューもまた味があります。

(○ ○)

そのときにメール交換されている方もおられて、徐々にですけれども、うまくいっているという気はしています。

正直申し上げて、本当に気軽に参加したマリージュなので、今この場にいるのが不思議な感じですが、この活動を通じて少子化に歯止めがかかればという気はしています。

あとは、実行委員を始めて、この活動を通じて竹原市に多くの方が在住されて、人口が増加して、活気ができればと個人的には思っています。短いですが。

(知 事)

いいえ、ありがとうございます。ごめんなさい。私、資料を置いてきてしまったのですが、竹原の人口構成的にいうと、高齢化というのはどれぐらいですか。市長がいらっしゃるから市長に聞いたほうがいいかもしれないけれども、高齢化は結構高かったような記憶なのですけれども、31%ぐらいですか。では、割と高齢化先進地域というところもありますね。そういう状況にあるのですね。

人口の減少というのはどうでしたか。自然減も結構多いということですか。社会減もありますか。

(知 事)

すみません。資料を置いてきてしまったものですから。そうすると、やっぱりまちの中にいらっしやると、少子化とか、子どもが減っているというのを実感されますか。

(○ ○)

そうですね。僕が小さいころは、よく公園とかで野球をやったり、かけずり回っていたのですが、僕が大人になってみると、公園で遊んでいる子どもはほとんど見ないです。それだけ少ないのかなと思います。

(知 事)

実際、若手の方、○○さんも若手に入ると思うのですけれども、皆さん、その危機感というのはどうですか。結構高いですか。

(○ ○)

どうなのでしょう。おまえが言う前に結婚しろよと言われそうなのですけれども。

(知 事)

でも、実行委員をやって成就していないというのは。

(○ ○)

正直、人の世話なんかしている場合ではないかもしれないですけれども。

(知 事)

いやいや、きっといいことがあります。

今、県全体でも、御存じのとおりそれは大きな課題になっていまして、今年、「みんなで育てる子ども夢プラン」というのを作りまして、子どもを育てるということをいかにみんなでやっていくかというプランをつくったのですけれども、実はその中で議論になったのが、少子化対策ということを直接的にやるかどうかということが一つありまして、直接的に言うとも、政策的には少子化対策というのは子どもを増やしましょうという政策なのですけれども、これは実は賛否両論あるのです。つまり、昔の「産めよ、増やせよ」的なものとか、女性の産む権利、産まない権利というものに対して干渉するようなイメージがあるので、それはどうかと意見が分かれてしまうのです。ただ、そうはいっても、本当に人口が減っていくと大きな問題にはなっていくので、そういう意味ではこういう形で地域の中の取組みとしてやっていただくというのは本当にありがたい話だと思います。特に竹原のような都市部でもそういう高齢化が進んだり、少子化が進んでいるという現実が

見えるところでは、非常に分かりやすい取組みなので、是非公私含めて頑張ってもらいたいと思います。ありがとうございます。

それでは塚原さん、お願いします。

(塚 原)

大学3年生の塚原美緒です。よろしくお願いします。私は何かイベントの企画をするのが大好きで、高校のときから3年間文化祭実行委員をやって、今も大学で大学祭実行委員会をやってます。その延長というわけではないのですけれども、前回の竹原市の成人式の実行委員会を。

(知 事)

今年の1月の。

(塚 原)

はい。今年の1月の成人式実行委員を務めさせていただいて、形式にとらわれた式ではなくて、参加者全員の思い出に残るような式というのをみんなで目標にして、いろいろイベントを企画させていただきました。例えばフィーリングカップルだとか。

(知 事)

よく知っていますね。

(塚 原)

フィーリングカップルって名前が大きすぎるのですけれども。

(知 事)

5対5というのではないのですね。

(塚 原)

会場全員で、自分が持っているお題と同じお題を持っている異性を会場の中から探して、その集まったペアでクイズに挑戦したり、ちょっとフィーリングカップルとは違うのですけれども、そういうことをしました。

それで、今、学生ということで、具体的に竹原のために何か活動をしているというわけではないので、私が地域の活性化のために率直に思ったことを言います。

今、竹原市を活性化させるために、産業を発展させるとか、新しい産業をもっと宣伝していくとか、そういうことも大事だと思うのですけれども、まずその前に、活性化のため

に一番必要だと思うのは、観光客を呼ぶことではなくて、移住してくる人を集めて、もっとももっと住む人を増やすことだと思うのです。それが活性化につながるのだと思います。

そのためにと考えることは、もともと地方の地域というのは、人と人、他人同士の距離もすごく近くて、温かい感じがして、本当はすごく住みやすい地域だと思うのです。本当の住みやすさというのは、物があふれていることだとか、交通機関がちゃんとしていることだとか、そういうことではなくて、介護とか医療とか教育とか雇用とか、そういった福祉の面がしっかりしていることが本当の住みやすさだと思うのです。なので、そういったところをちゃんとしたらよいのではないかと思います。例えば雇用であったら、企業誘致をして雇用を創出するとか。

私が人を集めることで一番大事だと思うことは、これからは教育の分野をちゃんとしていくことだと思うのです。というのは、今、学歴が重視されている。だから、ちゃんと教育を受けられるように、教育といたら、竹原市には塾とかも少ないし、私立の学校もないということで、そういうちゃんとした教育を求めようと思ったら、どうしても外へ外へ若い人が行ってしまうと思うのです。地域なら地域で、例えば少人数制の学級をつくるとか、もしくは、ちょっと突拍子もない意見みたいなのですけども、この学校だと全員が1ヵ月間アメリカに留学できるとか、そういう特典を付けるとか、実際こういうのを実施している地域もあって、それがすごく魅力だったという意見を聞いたこともあります。なので、そういったものを充実させたら、若い人にとっても魅力で、自分が将来子育てをするときにここの地域を選ぼうという本当に魅力になると思います。

ですけれども、実際は人数が1人少なくなったから、今まで2クラスだったものを1クラスに減らしたりとか、先生の数を減らしたり、また産婦人科についても、その山下産婦人科だったものがもう産婦人科がなくなってしまって、子どもを産む環境が今、竹原市には整っていない。そういった福祉の面を充実させてほしいと思います。そしたら、若い人がもっと竹原に住んで、竹原で生活していこうとなるのではないかと。それが地域の活性化につながるのではないかと思います。

(知 事)

ありがとうございます。地域の活性化のためには住む人、人に住んでもらうということですよ。そのためには、介護だとか医療だとか福祉の充実が大事だし、あとは教育も大事だというお話だったと思うのですけれども、そうですね。竹原は、ちょっと市の関係者もいらっしゃるのですけれども、どうお感じになりますか。あるいは、広島県でもいいです。僕は県全体のことを考えているのですけれども、広島県はそういう点についてどうだというふうに感じられますか。

(塚 原)

広島県の福祉とか、その事情については分からないのですけれども、ちょっと前に授業でやったことなのですからけれども、広島県の有効求人倍率は0.7ぐらいでしたか。

(知 事)

今はもうちょっと低いかもしれないです。

(塚 原)

たしか全国で見たよりも低いらしいので、全国だったら0.8ぐらいで、だから、これから就職活動を控えている大学生の私としては、まさに就職活動が今年からなので。

(知 事)

そうですね。今、3年生ですね。

(塚 原)

はい。そういう部分を考えて、広島県の雇用だとか福祉とか、そういう問題はまだ充実しているとは言えないのではないかと個人的には思います。

(知 事)

なるほど。ちなみに、塚原さんは今日一番お若いのですけれども、高校生の方が来たらこういう質問をしているのですが、卒業したら広島県にそのまま住み続けられますか。

(塚 原)

住み続けたいと思います。

(知 事)

実はこれまで2人高校生がいらっしゃって、大学生には初めて聞いたのですけれども、お二人とも出ますと言われていて、それは正直な御意見だと思います。おっしゃるように、人が住まないとな活性化しないのです。なぜ広島に住み続けたいのかというと、それはなぜですか。

(塚 原)

それはすごくしょうもない理由なのですけれども、私はこれまで一度も広島県から出たことがないので、一回出てみたいという思いです。すみません。しょうもなくして。

(知 事)

いやいや、御両親がいらっしゃっていて、いきなり告白している感じだと申し訳ないですけれども。

(塚 原)

両親は来ていないので大丈夫です。

(知 事)

知り合いの人がいらっしゃるかもしれない。

でも、それはそのとおりだと思います。僕自身も東京に出ましたし、大学の進路を考えたときに、母親から一回は世界を見てきたほうがいいんじゃないと言われて、それで実は広島に残るか、東京に行くかを迷っていたのを、東京に行ってしまったのですけれども、また戻ってくればいいのです。魅力があれば、住む人を集めることができ、それは広島にずっと住み続けるという方もいらっしゃるでしょうけれども、よそから来る方もいらっしゃるでしょうし、塚原さんも一度出て、また戻ってきてもらうという、男性もすてきな男性が頑張らないといけないのですけれども、それでいいと思うのです。そのためには、おっしゃるように福祉、生活環境とか教育の問題というのは非常に大きいです。あと、雇用の問題というのもすごく大きいと思います。おもしろい仕事がないと、若い人がそこにチャレンジをしていってくれないということもあるので、それについては、僕としては積極的に取り組んでいきたいと思っていますところです。最後は、広島を元気にしてもらうために、人に住んでもらうという観点から、もう少し時間はかかると思いますけれども、よろしく願います。ありがとうございました。

(塚 原)

願います。ありがとうございます。

(知 事)

では、山田さん、願います。

(山 田)

竹原の食を考える会の山田と申します。竹原地酒と広島地酒を一生懸命販売している酒類小売店でもございます。どうぞよろしく願います。

まず、当会の竹原の食を考える会の活動をお話しさせていただきます。

当会の目的は、竹原の地産地消を図り、竹原の食文化、伝統を見直し、竹原の食を広め、名物料理を創造し、育成、普及させる地域活力を生み出すことが目的ということで、盛り

たくさんなのですけれども、食を通じて竹原のまちを活性化させたいということで活動しています。

最初は竹原が大好きな地元有志が集まったのですけれども、しかしながら、竹原の食について話すことができないメンバーが勢揃いしてしまっていて、竹原の食について語れないのです。これではいけないということで、知事が行っておられます宝さがしと同じことを実は1年目の目標で、食の宝さがしということで、生産地に赴くことにしました。生産地に赴きますと、竹原にはいっぱいあるのです。ブドウがあったり、ジャガイモがあったり、今日はタケノコを掘られたと思いますが、タケノコがあったり、もちろんお酒があったり、たくさんある。そういうことを知り得ることができました。

その知り得たことを2年目は伝えていこうということで、飲食店とか竹原の食に携わる方々と少しずつ輪になることができて、書類でお配りしておりますけれども純米吟醸竹原焼きとか、昔からの郷土料理で、今日竹鶴酒造さんがおいでになられていますけれども、竹鶴酒造で郷土料理で「竹原魚飯」というのがございます。そういったものを図書館の協力のもとよみがえらせまして、今、市内8店舗で発売しているところです。

3年目は、竹原の食の創造を今後行っていきたいと考えています。

この食を通じて活動を行っていく中で感じたことを御提案申し上げたいと思います。

一つ目は、農業、漁業従事者の方々の生産しやすい環境づくりと後継者対策です。といいますのも、1年目に宝さがしで生産地に赴きますと、ほとんどの方が高齢の方であるということと、後継者不足に悩んでおられる。生産者の方がつくろうにもつukれないということがございます。今、BUYひろしまとかSELLひろしまという売る買う以前に、生産者の方に光をあてていただいて、生産者の方がつくりやすい環境づくりというものを是非御検討いただければと思います。

二つ目に、平成20年から平成24年までの広島県食育推進計画というのがあるのですけれども、官民一体となったさらなる食育推進を御検討いただければと思います。といいますのも、2年目に食のディスカッションというのを私たち竹原の食を考える会でやったのですけれども、そのときに一番驚いたのは、私たちは食のプロフェッショナルの方々に集まっていたのですけれども、そのときに名刺交換から始まったのです。皆さん御存じの方ばかりが集まっておられるのだろうと思っていたら、いきなり名刺交換から始まりましてびっくりしたのです。行政だけではなくて、官民一体となって同じような問題意識と協調意識を持ってベクトルを伸ばすことができないかと考えました。

三つ目が観光振興についてです。昨年度、広島商船高等専門学校さんと他団体との協力事業ということで、呉線、さざなみ線を使って、呉線・瀬戸内マリンビュー号、ぶらり旅商品の開発と文化伝承、地域教育モデル実験というのをJR西日本、瀬戸内さざなみ線利用促進委員会、沿線6地区のガイドさん、特産品生産者の方々、商船の学生さんとの協力のもと、沿線6地区の小学生が呉線の電車の中でガイドリレーを行うというものだったの

ですけれども、瀬戸内のマリレビューの中で沿線の子もたちが自分たちの地域のまちの自慢を、ならではの食とか、そういったものをPRしてガイドリレーしていく。最後は自分たちのまちならではの食材を選んで、子どもたちが料理したものをマリン弁当という形でつくって、その中でみんなで食べたのです。そういう事業を行っています。それをやったときに、やはりこの国立公園の瀬戸内を魅力的に有効に活用して、観光振興につなげることはできないかと考えました。

現在、船の航路は減便、廃止といった問題に直面して、竹原も昨年四国行きフェリーが廃止となりました。このフェリーや船を使って、瀬戸内海に面した各町をめぐって、JRや公共交通機関を利用した瀬戸内海を回遊する旅の開発ができないかと思いました。船やJRの各拠点には自転車の乗り入れ、貸し出しなどを可能にして、エコにも配慮した旅がよいのではないかと思います。

竹原は、広島空港をまっすぐ南におりていただくと竹原港ですので、竹原港を拠点にして、音戸の瀬戸をめぐって、呉、広島、宮島をめぐるコースであるとか、三原、尾道、福山としまなみ海道をめぐるコース、多島美をめぐるコースなど、多数のコースが考えられると思います。また、海の駅を有効に活用して、幅広い楽しみ方が可能になるのではないかと思います。

その船の中には、もちろん地元の食のおもてなし料理を考案して、広島地酒とともに楽しんでいただく旅のプランを是非御検討いただきますようお願い申し上げます。

竹原と三原、呉間の中瀬戸地域というのは、知事が掲げる海の道1兆円構想の重要な位置に存在すると思いますので、どうぞよろしくお願いたします。

(知 事)

よろしくお願いたします。ありがとうございます。今のお話は、食の宝さがしという中でいろいろな活動をされて、生産者の問題と、それからユーザーとしての、消費者としての食育の問題、それを地域の振興につなげるという観点からは観光というのが重要ではないかというお話だったと思います。

宝さがしでいろいろなものが見つけられたというお話なのですが、もしこれを大きく展開していくとしたら、どういったことが課題になると感じていらっしゃいますか。食べ物私も観光に非常に重要なものだと思うのです。ただ、あまりたくさんいろいろあると、これまたよく分からなくなるし、かといってあまりバラエティーがないのも、今、広島のイメージはカキとお好み焼きぐらいしかないという問題もあって、いろいろ増やしたいと思っているのですけれども、その両方のバランスを見ないといけないと思っているので、実際にやっていたらどう感じられますか。

(山 田)

子どもたちが学校で食育を受けていまして、実は大人たちより子どもたちのほうが地域の食についてしっかり語れるのです。私たちの住む竹原では、例えばお肉とタケノコだと。安芸津町はカキとジャガイモだとか、はっきりと言えるのです。すごく立派だなと。僕は家でつくらないのですけれども、子どもたちの立派な包丁さばきを見てびっくりしました。ちゃんと料理もできました。そういう子がたまたま来たのかもしれませんがけれども。

(知 事)

竹原市の教育はしっかりされているというのは、そういうことでしょうか。なるほど。子どものころからの教育というのがそういう意味ではすごく重要ですね。

(山 田)

子どもの郷土愛を、先ほど塚原さんのお話にもありましたように、地域に根ざすような子どもたちをつくってあげれば良いと思います。私もUターンしてきた派なので、広島から出て、帰ってきて、広島はいいところなので、また帰ってきてください。

(知 事)

外に出たら分かりますね。

(山 田)

そうです。外に出ると、広島のごくいいところが目に付きますので、是非帰ってきてください。

(知 事)

ありがとうございました。

それでは、義本さん、よろしく申し上げます。

(義 本)

休暇村大久野島の支配人をさせていただいています義本と申します。よろしく申し上げます。

今日この会に出るといったら、私の知り合いからあれも言ってこれも言ってと言われまして、頭の中がこんがらがっておりますけれども、それも知事のこの宝さがしという事業にみんなが期待しているということのあらわれでもありますし、竹原市民の熱い思いを今日は持って帰っていただければと思っております。

私は、休暇村大久野島の支配人をさせていただいて2年目ですけれども、おかげさまで

今、お客様が非常にたくさん、2年間で利用人員で30%以上増えております。売上げも大体1億円ぐらいは増えたのですけれども、先ほど塚原さんは観光ではなくて住民を増やせということでございましたが、こちらのほうは即効性のあるお客様をいま現在増やしている途中でございます。

それはなぜかといいますと、滞在型で大久野島に1泊だけだともったいないから3泊しましょうというプランを出したら、3泊していただいて、3泊が来るのだったら5泊はどうですかという、5泊も来ていただいて、5泊も来るのだったら30泊はどうだというので30泊プランというのをつくったのです。そしたら、おかげさまでこれも大変ヒットしまして、今、290泊というお客様も、一昨年9月から。

(知事)

住んでおられるじゃないですか。休暇村に290泊ですか。

(義本)

ずっと290泊。途中で帰ってもいいのです。今、私どもちょうど修学旅行のシーズンなので、ちょっと旅行に行ってきますと、今は旅行とかに行かれています。6月の中旬ぐらいにまた帰ってこられますけれども、「ただいま」と帰ってきていただけます。

こういう「日本人よバカンスに目覚めなさい」というチラシもつくりまして、バカンスというか滞在型の旅行を提案させていただいたところ非常に受けたのですけれども、私どもだけでなく、竹原とか、町並み保存地区とか、忠海の地場産業アトムさんとか、アヲハタさんとか、そういう工場の見学とか、それから島ですからクルージングで尾道に行ったり、輛に行ったり、呉に行ったりということもやっています、島を拠点にして滞在でも飽きさせない工夫をしております、今から新しい旅の流れかなと思います。日本旅行連盟か何か主催するものにこの30泊プランを応募したら、おかげさまで特別賞もいただきましたので、時代としては、あまり急いで行く旅行よりは、こういう滞在型が今後とも増えてくると思っておりますので、今後も一生懸命やっていくつもりでございます。私もこんなにヒットするとは思っていませんでしたが、あの手この手でいろいろアンテナを張って、これからの旅行の提案をしたいと思っております。

五番目となると、知事にお願いする意見もかぶってくるころがありまして、私は三点あるのですが、その中でインバウンドの取組みを。

(知事)

インバウンドというのは、ちなみに外から広島に来ていただく観光という意味のインバウンドです。アウトバウンドというのが、広島の人が観光に出かける。旅行業者さんはそれでお金が落ちるのでございますけれども、広島の人には落ちないので、広島に来てもらうとい

うのがインバウンドです。

(義 本)

ありがとうございます。インバウンドで海外のお客様に来ていただくというのをやりたい。昨年国交省がやっている台湾の招致事業に参加させていただいたのですが、県単位で、福島県であったり、秋田県とか、九州は九州というひとくくりでブースを持って積極的にアピールをしているのですが、その中に残念ながら広島県は食品会社の社長と私だけだったのです。悲しいかな、観光業は私だけだったので。

(知 事)

大久野島が独占できますね。

(義 本)

それはありがたいのですけれども、広島県は知っているけれども、大久野島休暇村って一体何ですかと、そこから始めないといけないのです。それをお願いしようと思ったら、今回6月に台湾で中国5県でやるということでしたので、それは私ども積極的に参加したいと思っております。ただ、先ほどありましたアウトバウンドに向けたようなタイムスケジュールに飛行機がなっていたりとか、円高とかそういう影響もあると思いますけれども、広島県はアメリカの観光のお客様が一番多いと聞いておりますので、アジアもそうですけれども、例えば橋下知事と相談して、だめなら関空経由広島とか、そういったアメリカから直接乗り入れできるとか、アジアでももう少しタイムスケジュールのいいような、なかなか難しいとは思いますが、海外のお客様ももっと幅広く、ああいう立派な空港がある割には、いろいろ事情もあるでしょうけれども国内便が減便になったりとか、そっちの方向ですから、是非活用していただいて、あの周りも全部波及していけばいいと思っております。羽田がいよいよ国際化してきますので、あっち側ばかりに行ってしまうと東に偏るかなと。西にもお客様を呼ばないと、と思っておりますので是非空港の活性化というところを思います。

二番目には、先ほども山田さんからありました空港から下にありますと竹原でございますので、この風光明媚な、瀬戸内海国立公園という日本でも代表するような最初のほうにできた国立公園ですから、是非それを見ていただく。それは内外のお客様、外国だけではなくて国内のお客様も十分呼べるころだと思えます。特に竹原のあのあたりは小さい島が多いので、多島美と呼ばれる一番のところでございます。瀬戸内海の中のちょうど真ん中あたりが竹原、忠海でございますので、今度は竹原でど真ん中祭りというのを、忠海とか大久野島でやったらどうかという話も出ております。しまなみ海道もできて、竹原・今治ルートはなくなりましたが、忠海から大三島へ行くルートはまだ残っております。

す。そこがもっと来るのかなと思ったら、そんなに来ないですね。ただ、拠点性といえば忠海の港からは今治も近いわけですから、そこをもっと活用できないか。あそこの港は、観光バスを待機するところがなかったり、大きなトラックもなかなか待機できない。道が細い。すぐチケット売り場があるので、子どもさんが飛び出したりとか危ない。うちの観光のお客様が来ていただいたとしても、港のプロムナードというか、わくわく感、これから旅行に行きましょう、離れ小島にちょっと遊びに行きましょう、リゾート地に遊びに行きましょうといったときに、あそこの港ではちょっと寂しいものがある、もうちょっと楽しい、どこかリゾートに行きましょうよというような。

(知 事)

ジャングルクルーズのガイドさんみたいな人がいるといいですね。

(義 本)

そうですね。そういうちょっとわくわく感があるような港の活性化、駐車場もいつもいっぱいなのです。どこに言えばいいのか、うちの宿泊のお客様とか、本当に忠海港を利用する方の駐車場というのが非常に不足しております。あの辺を是非活性化していただければと思います。

それから、三つ目が先ほど言いました「みなとオアシスただのうみ」というのが本登録されましたので、その中の会合を今度9月25、26日で全国大会をやることになったのですけれども、そこで瀬戸内ど真ん中祭をやるかと。そのときには是非知事にお越しいただいて、パネルディスカッションでもしていただいて、瀬戸内1兆円構想をそこでしっかり御説明いただければいいと思います。今、鞆とか脚光を浴びているところもありますし、182万人とか、この時期に非常に観光のお客様が増えたりとか、呉であったり、宮島であったり、有名なところは今でも観光のお客様はたくさん来られていますけれども、黙っていても来るところはいいのですけれども、来ないところに注目していただいて、竹原、忠海とか、このラインでしっかりとお客様が呼べるようなものができればと思っております。是非この眠った宝を探し出していただいて、味噌樽の中に入れていただければと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。今のお話で、まず、大久野島の国民宿舎の利用率の向上と売上げの向上というのは素晴らしい成果だと思うのですけれども、30泊プランというのは私も目からうろこで、まさかそんなものが受けるとはとても想像できないのですけれども、でも実際やってみるとそれが受けるというのは、本当に素晴らしい。

(義 本)

そうですね。本当に湯治みたいになるのかなと、湯治プランというような薄寒いイメージにはしたくなかったので、バカンスとか明るい雰囲気、離れ小島でゆっくりしましょうという。

(知 事)

そういうニーズがあるということですね。

(義 本)

そうですね。リタイアされた方ばかりですけれども。

(知 事)

我々はちょっとそれに気がついていないというか、今、広島県で1泊してもらうのも苦労しているのですけれども、むしろ30泊といったほうがいいのではないかというぐらいで、特にそういう島の場合には不便さがあって、逆にそれがいいんでしょうね。

(義 本)

そう思います。

(知 事)

それは何かいろいろなものの典型が詰まっている感じがして、既存の概念を打ち破るといって、弱みを強みに変えるだとか、いろいろなもののモデルだなという感じがすごかったです。それはただの偶然ではなくて、2泊して、5泊してというのを積み重ねられた上にあるので、単にギャンブルをやったわけではなくて、素晴らしいと思いました。本当にありがとうございます。

少しだけお話をさせていただくと、インバウンドについては、御指摘のとおりこれから力を入れていきたいと思っていて、台湾は私も先日行ってきたところです。インバウンドのプロモーションを一緒にやりましょうというのを中華航空さんとか台湾の旅行会社の皆さんと話をしてきたところです。悩みもあって、私の悩みも聞いてほしいのですけれども、先ほどの飛行機なども確かにインバウンド向けには悪い時間なのです。ナイトステイをしているものが多いのです。上海便もそうです。ただ、こっちから行く人が多いので、飛行機の搭乗率を上げようとする、どうしてもこうなってしまう、かといって搭乗率が下がると、飛行機便が減ってしまうという、これはジレンマでどうしたらいいか、また目からうろこを。

(義 本)

今、コンチネンタルとU Aが合併をしたのでグアム便を何とかするとか、いろいろできないかと思いつながら。

(知 事)

またいろいろ教えてください。

(義 本)

とんでもございません。よろしく申し上げます。ありがとうございました。

(知 事)

山内さん、お願いいたします。

(山 内)

こんにちは。私は竹原商工会議所の地域開発委員会という委員会がありまして、そちらのほうのお世話をさせてもらっています。この竹原というところは3万人弱のまちで、他の市町さんも一緒だと思うのですが、その中でそれぞれの団体の活動というのは非常に活発なのですが、みんなばらばらでなかなかまとまりにくい。兼任されている方が非常に多くて、どこに行っても同じような顔ぶれになって、感情的な軋轢みたいなものが潜在的にあるのです。そういう小さいけれどもまとまりにくいというまちの中で、会頭の呼びかけでこの地域開発委員会というのを設立されて、ちょっとユニークなメンバー構成で、いわゆる企業人だけの集まりではなくて、私みたいな会社をやっている者、あるいは建築士の方、司法書士の方、あるいは福祉施設にお勤めの方、それから市議会の方とか、市の職員さんにも参加してもらって、幅広く竹原市の、特に30代、40代の現役で活躍されている方々に集まってもらって、今2年間ほど活動してまいりまして、先ほどもありましたように、最初は定住人口の増加とか交流人口の増加という片意地を張るような内容で進めていたのですが、やはり現実を考えると、これだけ高齢化や過疎化が進んでいるまちでは厳しいと。この現実を受けるような流れの中でまちを活性化させようじゃないかというところにだんだん落ちてきてきて、竹原らしさというのは何だろうか。住むにはすばらしいまちだけど、何が竹原らしさかという形でキーワードをさぐったところ、弱者やお年寄りに優しいまちというところに、ありきたりの言葉ですけれども、そういうふうになりまして、そういう気を持ってまちのグランドデザインを考えてみよう。

そういう形で進めると、まずは入口、駅がバリアフリーになっていないのです。今、5,000人を割る駅は、JRのほうもそういうのは対象外で、交渉しましたがけれどもなかなか難しい現実がありました。ですけれども、竹原には忠海とあって、隣のまちには福祉施設とか

障がい者施設がありまして、そこら辺は上手にエレベーターを付けずにバリアフリーを実現されて、そういう方々にもいろいろな参考をいただきながら、是非ともこのまちを入口からまずは切り開いて、それを水平展開していこうと、今、活動しています。

そういう中で、最初にお話ししたようにいろいろな団体があるのですが、そこらとうまく連携するには、こういう地域開発委員会みたいな委員会が非常に定位置、好位置にあって、我々独自で活動するという事よりも、ネットワークを結んでいくところを担っていければと思っていましたところ、一つの活動として、医師会、薬剤師会の方々が協力してくださって、竹原駅バリアフリー化推進協議会というものができまして、私もその発起人の一人をさせてもらっているのですが、ほかの団体の方々も協力してやっっていこうと。まさしく足もとからという話ですが、少しずつこういうものが竹原らしさという一つの題目でいろいろな団体に展開していければいいなと思っています。

私は本業のほうは製造業で、実は私もUターン組で、知事さんの経済成長という五つの中にありますけれども、やはり広島県は人口も、それから産業も、全国の指数でいうと非常に高い位置にあるように一見見受けられるのですけれども、自動車産業とか、そういうようなものに非常に傾いていまして、いわゆる未来型の産業というものは非常に乏しくて、今、大学の方もいらっしゃいますけれども、やっぱり今だったら広島大学の卒業生も20%ぐらいしか、特に研究者の方は受け皿がないのです。だから、そういう意味でもポスト自動車というか、ちょっと目線を変えたものをいかに今から構築していくか。民のほうからも声をかけていただいて、地域開発委員会ではないですけどもそういう幅広い人の集まりがあると思ってもいけないような貴重な考えが出たり、我々と同じようによそから帰ってきた人たちからもいろいろな意見が出て、私たちの委員会でも貴重なことになりましたので、是非そういう呼びかけをしていただければと思います。

(知 事)

ありがとうございます。これまで同じメンバーなんだけど違う活動であまり連携がなかったところを、連携をとって進められるというような試みなのですか。

(山 内)

この委員の選考は私はしていないのです。正副会頭のほうで、非常に閉塞感があるので、少し斬新な委員会構成ということでやられたのだと思うのですが、私もそのメンバーに入って、正直あまり期待はしていなかったのですが、思いのほか、思ってもいけないような非常に貴重な意見が出てきまして、そういう気づきが一つのやる気になって、私としてもやる気が出てきまして、ほかの団体の方と連携がとれる。今まではよその団体の悪口しか聞いたことがなかったのですが、それが。

(知 事)

仲良くしてみると、いいことがいっぱいあったということですね。

(山 内)

そうなのです。みんな思いは一つなのです。まちをよくしたいという思いはあるのですが、活動が批判合戦とか、足の引っ張り合いになっていて。

(知 事)

いかにそういう力を統合していくことが大事かということを実地に経験されていると私は感じたのですけれども、そういう中で駅のバリアフリー化にしても、成果が出てくるとまたそういう活動にエネルギーが出てきますよね。

(山 内)

そうですね。ただ、本当にJRも難しいと。JRの中でも言い分がありまして、かぐや姫とかそういう高速バスが台頭してしまっていて、JR離れが激しいのです。我々もJRにものを頼むばかりではなくて、本当に高齢者になると、公共機関で一番便利なのは電車なのです。そこへもう少し乗降客が増えるようないろいろな活動もないと、JRさんもこっちを向いてくれません。例えばカーブを応援しに行くときは特別快速列車が1日1便出るとか、いろいろなことを好きざんまい言っていますけれども、そういうような形でJRを使って、病院とかいろいろなところに行きやすい流れがつけられると、逆に障がい者の方も、お年寄りの方も竹原を訪れやすくなるし、駅だけではなくて町並みの観光地までをスルーでバリアフリーにしていくとか、今からいろいろな必要なことがたくさん出てきますので、まずは入口からやっっていこうという形です。

(知 事)

着実にそうやって活動されているというのは本当に心強いことで、そういった活動が各地で進んでいくことが、それは県全体としても同じことがあって、皆さんがばらばらだったりするのですけれども、それをいかに力を集めていくかということを私は目指したいというふうに思って、今、進めているところです。

あと産業のお話もあったのですけれども、それはまた。

(山 内)

別のテーブルを用意していただければと、よろしく申し上げます。

(知 事)

ありがとうございます。

それでは、實藤さん、お願いいたします。

(實 藤)

實藤と申します。よろしく申し上げます。

私は、今、専業主婦で5歳と3歳の息子2人がおります。長男の通う公立幼稚園で、PTA本部で子どもたちの幼稚園生活のためにお手伝いをさせていただいております。また、竹原市子育てネットワーク委員の一員として、現役子育て世代の目線で意見を述べさせていただいております。

長男を出産し、友達をつくりたくて市内の児童館や育児サークルへよく参加するようになりました。そして、現在も次男がまだ未就園児ですので、この次男を連れてよく参加しております。

竹原市は行政、民間ともに子育て施策にはとても力を入れてくれておりまして、未就園児が集える場所が確保されており、母としてもうれしく思っております。

しかしながら、先ほどから話も出ておりましたとおり、竹原市全体では人口が減って、子どもの人数が減っているのも現状です。

産業などの問題も先ほどから出ておりますが、私は母としての意見を述べさせていただこうと思っております。

私は岡山から嫁に来たのですけれども、息子2人ともこの竹原で出産しました。竹原は、現在お産ができません。ほかにも広島県で7カ所ぐらいの市町でお産ができないと聞いたことがあります。このことは、これから子どもを産もうとする母にとってはとても不安なことでありまして、住居を構える点において、竹原が候補にまず挙がらないという理由になっているかもしれないです。

昨年、市のほうで医療フォーラムというものを開催していただいて、それにも参加させていただきまして、いろいろ問題点、医師が不足しているとか、あと女性の医師が増えているので自分のお産、子育ての時間を優先するというので、産婦人科医というのが根本的に少ないと伺いました。問題点も理解できないことはないのですけれども、先日、新聞で因島のほうで唯一分娩を行っておりました病院で分娩が中止となったそうです。それで、そこはちょっと年な先生とその息子さんの2人でされていたそうなのですけれども、分娩中止となるということで、若い先生のほうが自分が出た大学のある北海道でしたか、北海道のほうの病院にまた戻られるということだったのです。この先生も去年の夏ぐらいにUターンをされて自分の実家の病院を手伝っていたそうなのです。先ほど話にも出ましたが、大体たくさんの方が一度広島を離れてしまう。Uターンして来られる方が多いということで、もしかしたらその中に産婦人科医でUターンしたいという方もいらっしゃるかもしれ

ませんし、この因島の先生のように広島へ帰ってきたけれども、また出なければいけないという、こういった方を確保するというをまず広島県全体で行っていただければ、もしかすると、分娩ができないまちで再び分娩ができるようになるのではないかと考えております。やはり近くの病院で産みたい。里の近くの病院で産みたいというのが母親の気持ちだと思います。

もう一点、別の話になるのですが、私の友人が30歳のときに乳がんで亡くなりました。昨年、伯母が子宮頸がんになりまして、これは治療して完治したということなのですが、がんという病気をととても身近に感じております。これも新聞で読んだのですが、子宮頸がんの予防ワクチンというものがありまして、初の公費集団接種というのが栃木県のある市で行われたそうです。また、接種希望者に全額助成している市も2カ所か3カ所あるそうなのです。こういったワクチンで軽減されるものであれば、そういったことも取り組んでいただきたいと思っておりますし、乳がんの検査というのが、今、公費で受けられるマンモグラフィーが40歳以上になっていると思っております。子育て真っ最中の私たちにとって、子どもを預けてまで病院で検査をする、ましてやお金を払ってというのはなかなかすぐに足が向かないので、母が元気でないといい子が育っていかないと思っておりますので、こういったマンモグラフィーの年齢も下げていただけたら、そういったことにこれから力を入れていっていただければいいなと思っております。

(知 事)

ありがとうございます。子育てと女性の観点からの御意見をいただいたのですが、出産の問題というのは広島県内でおっしゃるように非常に問題になっていまして、市では竹原もそうですし、庄原もできないし、江田島、あとは大竹もだめだったかな、かなりあるのです。これは二つ理由があって、実はお医者さんの数は、赤ちゃんが生まれる人数当たりのお医者さん、例えば100人当たりのお医者さんの数は実はそんなに少ないのです。むしろ増えているぐらいなのですが、出産の数自体が減っているのです、残念ながらお医者さんの正業として成り立たなくなっているということが現実としてあります。もう一つは、皆さん大きな病院で産みたいというのがあって、広島市でも大規模な総合病院はすごく人気があって、そういうところに集中してきているという現実があるのです。私も3歳と7歳の子どもの子育て中なのですが、この問題は身近な問題として感じられます。消費者側としての選択というか、それに対する啓蒙ということも必要なことになってきていると感じているところです。

安心できるということがやはり地域の暮らしでは必要だというのがさっきの塚原さんの御意見にもありましたけれども、それはおっしゃるとおりだと思いますので、引き続き頑張っていきたいと思っております。

(實 藤)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは東さん、お願いします。

(東)

まずもって、知事、今朝の運動会に御参加いただいて本当にありがとうございました。子どもたちも本当に喜んだ顔をして、いい思い出になったと思います。

(知 事)

ありがとうございます。

(東)

今日見ていただきました多世代型運動会、我々の趣旨としてスポーツを通じて地域の活性化をしていこうということで、先ほどから何度も挙がっています少子高齢化、バンブースポーツクラブは少子化と高齢化、二つに分けて事業をしています。

高齢化については介護予防事業、これは竹原市さんと一緒に、NPOと竹原市が一緒になって、介護保険になる前の人たちに、介護認定になる前にどうやってとめていこうかということをして市と一緒にスポーツクラブが進めているということが一つです。

もう一つ少子化についてなのですけれども、こちら行政と、こちらは教育委員会と一緒にさせていただいているのですけれども、机の上にカルテを用意させていただいているのですが。

(知 事)

このメディカルサポート問診レポートですね。

(東)

はい。何度も言っていますように竹原市は少子化で、例えば野球部が10人しかいないとか、バレー部が7人しかいないとか、1人のけががチームのけがになる。1~2人けがをすることによって試合に出られなくなるという環境にありまして、何とかしないといけないということで、そのメディカルサポート事業として我々医学療法士が定期的に出向いて、けがをしていないか、痛いところはないかということを進めています。

この二つの事業を進めていくときにどうしても行政の協力が必要でしたので、この話を持って行ったときに本当に快く、むしろ頑張れよと背中を押してもらったので、それが本

当に私にとっては住みよさを実感，そこに書いていますが，本当にやりたいことが今できていると実感しています。先進的なこと，前例がないことは嫌がると聞いていたのですけれども，この話を持って行ったときに背中を押してもらったときは，竹原市の職員が褒められたという話をあまり聞いたことはないのですけれども，僕は本当にうれしかったです。是非やってくださいと。進めてくださいと。いろいろなサポートがあると思うのですけれども，そういう一言のサポートが本当に私にとってうれしい一言でした。本当は職員さんに直接会って言うべきだと思うのですけれども。

(知 事)

多分聞いていらっしゃると思いますよ。

(東)

あまり振り返らないようにして，本当に介護予防とスポーツと高齢化とで，NPOと行政が一緒になって事業をしていけるということ，知事の初めの挨拶にありました「地域主権」のところでも何かしらのモデルになればと思って，これからも活動を進めていきたいと思っております。よろしく願いいたします。

(知 事)

ありがとうございます。行政の側からいくと，NPOの方を含めて，地域にそうやって貢献していただく活動というのは，私はすごくありがたいことだと思うのです。こういう言い方はあれですけれども，税金を使ってやるとお金もかかるのですけれども，でも，事業としてNPOの方々にやっていただけるとその分助かりますし，もちろん専門的な知識を持ってやられるので，内容的にも充実することが可能であるということです。そういう従来の公の主体ではないところと一緒にそういった公の政策を進めていくというのは，行政の側でも少し重要度を高めていかないといけないのですけれども，それがうまく回っているというお話だったと思います。それは非常にうらやましいというか，県内でもいっぱいそういうのが増えたらいいなというふうに私は思います。ありがとうございます。

(東)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは竹安さん，お願いいたします。

(竹 安)

吉名町女性会の会長をしております竹安幸代と申します。吉名町は竹原市の呉線沿いに一つ西側に行った安芸津町との境のまちです。山と海と畑と川が、水源から海まで通った川があります。生活している者も畑に携わる者、山・海に携わる者、サラリーマンであったり、そういう人々が知恵と工夫を出しながら生きています。

今、私が吉名町女性会の会長ということでいろいろ受けている内容のこともありますが、女性会は、今、県内でもどんどん女性会員が減ってきているのです。やはり高齢化になっております。吉名もそうですが、徐々に若い人が入ってきているのです。それは何かとというと、入ってきているの方がとても喜んで、楽しんでやってくさるということです。しんどいことはしんどいけれども、やってよかった。人に「ありがとう」と言ってもらえる。一家庭のお母さんは「ありがとう」と言ってもらえることがまずありません。お父さんからの「ありがとう」もきつくないと思います。

(知 事)

すみません。感謝しています。

(竹 安)

子どもからはあるかもしれませんが、母の日ぐらいですか。存在感がありません。みんな付属品です。何とかさんちのお母さん、何とかくんちのお母さん、何とかくんちのおばあちゃんということで、みんな付属品になってしまっています。ですが、女性会の中では一人一人個々が自分が持つ力の限りを出してもらえるように、私は仕組んでいます。必ずみんなに会長になった気分になってやってもらうことにしています。いい案が出てきたら、必ずそれを歯が浮くぐらい褒めたたえます。歯が浮いて抜けたという人はいませんので、大丈夫だと思います。そこまで褒めてもらわなくてもというぐらい褒めたたえます。失敗をしても褒めたたえます。あなたが失敗をしたからよかったと言って褒めたたえます。そうしているうちに、家に帰っても恐らくそういう話を家族でされるのだと思います。ある日、道でばったりその方のお父さんに会いましたら、なんだか今ごろすごい楽しそうに行きよるんじゃ。帰っても、ああしたらいいか、こうしたらいいかと試食ばかり食べさせられるんじゃが、というような話も出てきました。これはすばらしいことなのです。

今、吉名では食育という話もありましたが、小学校、中学校へも女性会は行っていろいろしております。教育にもお金はかかりますので、中学校では文化祭のバザーをしたときにほとんどうん万円の寄付をしております。敬老会もしたりします。一人暮らしのお弁当には中学生と行ったり、小学生がつくったものも入れてもらっております。とにかく人とかわらせる。かわることをして、そうすると興味が沸きます。楽しそうにやっているので、自分もやってみたいというお母さんたちも中には増えてきております。

私の一番の願いとしたら、お母さんはすり込みがきくのです。鶏ではありませんけれども、近所に 60 歳の定年になって帰ってきた人がいます。その人にどうしてこんな田舎にとは言いませんでしたが、どうして帰ってきたと聞いたら、こまいときにお袋と親父が年をとったらここへ帰ってきてこの家に住むんでと言った。ということで、嫁を説得して帰ってきたんじゃないかと。本当にいいお母さんだったんじゃないかと。それとか、発明とかいろいろなことをした人の話とか本を見たりしますと、どうしてそんなものをつくったかと言うと、お母さんが困りよったけ、お母さんがほしがりよったとか、まずそういう話が 8 割方は出てきます。なので、お母さんが困ったりしていると助けたいという人の気持ちがあると思います。そういうことをお母さんに言ってもらいたい。言っても聞かない子どももいますので、聞ける子どもにしておいてください。ということは、子どもの話を聞いてやってください。私も女性会の会員さんの話を聞きます。いろいろな話が出てきます。悲しいことに私は 51 歳なのですけれども、数学と国語ができればいいと言って母親から大きくされましたので、味噌もつくれませんし、何もかもできませんでしたが、この女性会に入ってから嫁入り修行をしまして、よそのお母さんに味噌のつくり方も、おすましのつくり方も、すしのつくり方も、母からは習いませんでしたが、よそのお母さんに教えてもらいました。でも、これは私だけではないのです。新しく入ってきた人とか、私より年齢が上の方とかも、そういう経験がないと、若い塚原さんができても、私もできません。それは経験なのです。今、一番危惧しているのが、そういう経験を持った人がいなくなっているのです。いても忘れていて、どうやるのか忘れたと言うのです。なので、今、生きる知恵をたくさん持っている人のそういう知恵を何とか絞り出して、物に残しておいてほしいのです。写真に残すとか、ビデオに残すとか、データに残しておいてほしいのです。というのは、聞いた私も忘れてしまいますので、広島県の生き力というか、そういうものを広島県でやってみてはどうかと思います。嫁に行った先でお母さんに言われたら頭に来たり、我が親に言われてももっと頭に来ます。ですが、隣の藤川さんが「ねえ、あんた、こうやったらええんよ」と言ったら、「そう。やる」と頑張れるのです。そういうこともありますので、是非ともそれをしていただきたい。

やっぱり世界につながる発想のものをつくるということを念頭に置いてしてほしいです。地域だけではなく、日本だけではなく、とにかく世界に発信していきたい。広島県は中国地方の真ん中であってあぐらをかいているのではないかと思います。人口がある程度あって、力もあるような格好をしている広島県は、はっきり言って人材不足です。いろいろなものが埋もれたままなのかもしれませんが、そんな気がします。

実を言うと、私の住んでいる地域では広島のリジオ放送はほとんど入りません。愛媛県の松山の放送がどんどん入ってくるのです。大分の放送とか、違うところもあります。大阪の放送とか、よその放送がどんどん入ってくるのです。広島県の放送が入らないからかどうかわかりませんが、広島県とよそは違うと思います。

違いついでなのですからけれども、防災のことをやってほしいと思います。先だっても家におりましたら、ぐらぐら来ました。私も実はたんすの上に留め金をしていません。どきっ。女性会の会長さんがたんすの下敷きになっただけでは困るなどと思いながら、防災のことをしたいとすごく思います。よその県では、知事さんも御存じだと思いますが、かなり小さいときからそういう経験をさせて訓練をしております。広島県の子が広島県だけにずっといるとは限りません。よそに行ったときに、大丸の火事でしたか、小さいときに、小学校、中学校で訓練したことをそのままやったら生き延びれたということもありますので、是非とも命を自分で守れる子どもに、そして大人になってほしいと思います。命がずっと続いて文化が続いていくように、と思って私も女性会のお世話をしております。

あと、いろいろな会合へというのがあったのですけれども、それはやはり主宰者同士が仲良く、意見が交流できるような形、前の方も言われましたので、これは飛ばします。

あと、広島県にお願いしたいのは、お父さん、お母さんが子どもを見るために子ども休暇はあるのですけれども、孫を見る孫休暇を県の条例でつくってもらえないかと思います。というのは、お父さん、お母さんが働いていて、今、少子化と言いますが、私たち、おじいちゃん、おばあちゃんになる人も少子化なのです。一人、二人しかいないのです。なので、見きれないのです。2日でも、3日でも、5日でもいいのですけれども、孫休暇がほしいと思います。よろしくお願いします。

(知 事)

ありがとうございます。大変多岐にわたる御意見をいただいて、今、どうまとめようかと思っているのですけれども、一つは、女性会を中心にした活動で、やっぱり共通しているのは、皆さんの力を出そうということで取り組んでおられて、それが元気につながっているということだと思えるのですけれども、竹安さんの場合には吉名町の女性会という地域の、ある意味では小さな集まりだと思えるのですけれども、その中でもそうだし、今の竹原市全体の活性化というところでも、いろいろなグループの人がネットワークで元気になっていったとか、いろいろな見方が生まれたということがあったのですけれども、そういう共通するものがすごくあるとお話をお伺いしながら感じました。

防災とか、孫休暇というのはいろいろ考えさせてください。孫休暇というのは目からうるこだなという感じがしたのですけれども、確かに今面倒を見るのは親とは限らないですよ。ありがとうございます。

(竹 安)

ありがとうございました。

(知 事)

それでは藤川さん、お願いいたします。

(藤 川)

駅前商店街「若おかみの会」の藤川万里子です。今朝はありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございました。

(藤 川)

今、取り組んでいるのは駅前商店街の活性化ということで、少しでもにぎわいを取り戻したい、シャッター通りを何とかしないといけないということで、3年前に商店街の理事長の声かけで「若おかみの会」を立ち上げました。そのとき、私が竹原の世間に出たのは初めてのことで、最初は何をしいいかも分かりませんし、人も知りませんでした。だから、イベントをするにしても、あわあわで、どうしたらいいのか分からなくて、そのときは会議所の方とか、市役所の方に泣きついて、いろいろなアドバイスをいただきながら始めました。何とか、続けていくことが一番だと思って、シャッター通りとか、せっかくアーケードがあることを活用したらどうかということで、「きてみん祭」という定期市をしようというのが、私が声をかけたのではなくて、出店者の方が、たった2~3名だったのですけれども、これではいけない。やろうやという声かけで、ずっと毎月するというので、自分が第3日曜日が休みなのでそのときにしようということで始めました。それからあれこれ声をかけて、県内のふるさと産品の方のそういう協議会があるみたいで、そういうところつながりもできて、声かけをして来ていただくようになって、今やっと2年目に入りました。出店者の方が少しずつ増えていますが、ほかで大きなイベントがあるとそっちに行ってしまうので、ちょっと寂しいときもあります。だけど、ぼつぼつ、日曜日は商店街に誰もいないのです。眺めても誰も通っていないところへ、朝市をするだけでもせめて人に来てもらえる。それと、若い世代にあいふる通りがという話をしたときに、あいふるはどこなのという話があったので、イベントをすることで忘れ去られないように、せめて月に1回でもいいからイベントを続けていこうとしています。まだ集客はいまいちです。多分、告知不足とか、広告不足で認知されていないのが強いと思っています。これが今からの課題だと思っています。

それと、今ちょうど取り組んでいることが、竹原の中心市街地ということなので、竹原駅前商店街は中心ということで活性させる責任があるという理事長の強い思いがありまして、今、一生懸命に取り組んでいるのは、空き店舗対策、誰か入ってくれないかな、チャレンジショップとかテナント事業。それと、アーケードもかなり老朽化しているのでどう

しょうかというのと、商店街は一方通行なのです。それと、街路樹がたくさんあって、停車帯はどうかとか、いろいろな課題が残っていて、それに取り組んでいます。国や市の財源をお借りしなければいけないということで、事業計画とか、そういったことに対して一生懸命取り組んで、財源のほうは市役所の方とか会議所の方とかに一生懸命アドバイスや指導を受けながらしています。

ハード面ばかりに気をとられるのではなくて、若おかみの会として私たちは何をすべきかということで、一番にしなければいけないのが地域とのつながり、人と人とのつながりということで、私は広報活動とか人とのつながりづくりに一生懸命走り回っている状態です。なぜ一生懸命にやるのかと言われたとき、次の世代へちゃんとつなげることができればと。自分の事業であったり、商店街ももちろん活性化させて、自分たちの次の世代、子どもたちであったり、若い世代につなげればいいなというのがとても強い思いで、それが私たちの責任感になっているので走り回っております。それだけです。

(知 事)

ありがとうございます。「若おかみの会」のきっかけが、商店街の理事長さんが声がけをされたということですのでけれども、どうして「若おかみの会」だったのでしょうか。

(藤 川)

鬼嫁の会にしようかと。

(知 事)

いやいや、その表現の問題ではなくて、若旦那の会とかではなくて、おかみさんと。

(藤 川)

おかみの会というと、いま現在いらっしゃる人は姑さんがいるので、大おかみが出てきたら意見が途切れてしまうから、若いほうが出るという思いも一つありまして。

(知 事)

新しいアイデアとか、そういうことですか。

(藤 川)

そうです。どうしてもおかみの会にしてしまうと、私がおかみだと言って出てこられたら、ちょっと古い考えばかりが通ってもいけないからということで、じゃあいいよ、鬼嫁の会にしようとか誰かが言ったのですけれども、いやいや、若おかみの会と。その中で一番高齢なのですけれども、気持ちはみんなに負けていないので。

(知 事)

またここでも出てきたと私は思ったのですけれども、今、その「若おかみの会」の中で、実は出店されていた方の外の方のアイデアからこの「きてみん祭」が始まっていったということで、いろいろな人のネットワークだとか、力だとか、アイデアというのを活用するということと、その意欲を持って取り組んでいらっしゃるといことがそういうふうにつながっていったというお話だと私は受けとめて、今日繰り返し出ているテーマのような感じがして、竹原はそういうところなのかというのを思いました。

地域の人とのつながりとか、人のつながりを大切にされたいということで、そういう中でまた力になってくれる人だとか、アイデアだとかが生まれてきそうな感じを私は受けました。ありがとうございました。

ちなみに、今朝「きてみん祭」をちょうどやっていたのでお邪魔させていただいて、楽しい雰囲気でしたね。今日は天気もよかったというのもあるのですが。

(藤 川)

雨が降った日はもともとれないのです。寂しく、売上げがなかったときもあるのですけれども、出店者の人たちが持続、継続じゃけんのと慰めてくださいます。とにかくやろうと。でも、水揚げにならんかったじゃろうと言うのですけれども、それでもつなげていくことじゃけんのと、本当に力をもらいます。そっちのほうがうれしいです。

(知 事)

そうですね。今日が1日かけての行事でなかったら鯛を買って帰ろうと思ったのですけれども。すごくおいしそうな鯛がありました。ありがとうございました。

(藤 川)

ありがとうございます。

(知 事)

一通りお話をお伺いさせていただきまして、本当にありがとうございました。

自由討論

(知 事)

時間は押しているのですけれども、これから全体での意見交換をさせていただければと思います。

今日、実はお話をお伺いしていて驚いたのは、僕の竹原のイメージというのは、町並み

保存だとか、頼山陽だとか、あるいは塩田から始まった歴史とか、そういうところに皆さん強みを感じていて、そういうところに取り組んでおられる方が少なからずいらっしゃると思ったのですけれども、今日は人選の問題だったのかもしれないのですけれども、皆さん意外とそうではなくて、いろいろなことに取り組んでおられるという感じがするのです。一方で市民の方はどんな感じで受けとめられていらっしゃるのですか。歴史を背景とした、歴史の蓄積だとか文化の蓄積、この文化というお話は最初にいただきましたけれども。どうなのでしょう。

(山 内)

あの場所だけでは、滞在時間は1時間なのです。お昼を食べて、トイレだけ利用して帰っていただくというようなので、もちろん町並みは重要な観光のスポットなのですが、それこそさっきの話でもっともっといろいろなところをリンクしないと、なかなか滞在時間が延びないという現実がありまして、あそこは本当に素晴らしい資源なのですが、もっと違うところを探っていかなければ、例えば義本さんのところとか、そういうところとリンクしないと難しいというところに今はなっています。

(知 事)

なるほど。ありがとうございます。ほかの方はどなたか。

(義 本)

イメージ的には私も外部から転勤でこっちに来たのですけれども、やはり竹原という町並み保存地区というのが一番には来ると思いますし、観光のお客様も、お連れすると必ず非常に喜んでいただける。それはメインにはなるのですけれども、いかんせん滞在時間が短い。一回見れば「ありがとう」で、二回目に行こうかというのがなかなかないので、そこからまた波及しないといけない。

今日のお話のように、非常に魅力的なところがまだまだたくさんあります。情報発信が下手なのかもしれませんが、いろいろ魅力的なところはたくさんあります。メインで考えていただくのだったら、それを基地にして、町並み保存地区はこうですということをもっとアピールして、そこから波及していけばいいというふうには思っております。

あの中に竹鶴さんであったり、酒造メーカーさんも2軒ありますし、だから竹原のお酒をイメージアップということもあります。西条だけに負けておられませんので、と思っております。

(知 事)

ありがとうございます。

(竹 安)

大事な竹原町並み保存地区なのですけれども、たしかに年がら年中あれがあって、あと竹原は祭りの多いところなのです。忠海の天神祭りとか、いろいろな祭りが、忠海にもたくさんありますし、北部の仁賀のれんげ祭りがあつたりとか、地域が頑張ってる祭りがたくさんあります。竹原のあそこは定番でとっておいて、来たときには常にそこに行ってもらって、いろいろなところにもまた戻ってもらう。

吉名も、さっき言わなかったのですけれども「よがんすのお〜祭り」といって、吉名はジャガイモと煉瓦とカキに非常に力を入れております。

そういうことで毎年違ったものをポイントで持ってきて、お客様に来てもらって、来たときには竹原の町並みにも行ってもらう。いろいろなところにも行ってもらおうというようなことも考えながら、ポイント、ポイントで、桜まつりをしてみたりとか、そういうことを考えないと、ワンポイントだけで1日過ごせるだけの量でも質でも、内容はPR不足ということもあるのではないかと思います。

(藤 川)

以前、おじいちゃんたちの団体と一緒に話したのですけれども、竹原はさっき言われたように地域で祭りが本当に多いのです。毎月やっているじゃないかというぐらい多いから、のぼりをつくらうと。きてみんなさい祭りだらけ竹原で、スケジュールをずっと書いて、ポスターを広島へ張りに行こうかねと話までは出ています。実現できるかどうか、祭りをちょっと集約してみたいという話までは出ています。

(國 兼)

私の住んでいるところは竹原市でも北部のほうなのですけれども、昨年もふるさと再発見事業というので、古墳とか、古い小早川神社、とても汚くなっていますけれども、いろいろあります。そういうところを勉強しながらまとめていく作業を今年はしたらいいねという話も出ています。さっき意見が出ましたように、町並み保存地区はとてよくなっているし、憧憬の路とか、竹祭りとか、私もお祭りは大好きなので、そういうイベントに参加しますけれども、そのときだけになって、ほかにもいっぱいあるのにPR不足だと思います。

北部に行くのに東野の賀茂川沿いにサイクリングとかをしたら、東野町の石垣あたりの景観は私は大好きです。春などは特に赤いしだれ桃ですか、ピンクのきれいなあの景観が大好きなのですけれども、別にそれは観光名所でもなんでもありません。ああいうのもっともっと探したらいっぱいあるのです。いっぱいあるのでマップみたいなをつくらうという話もあるのですけれども、そういうのを上手に引き出したら本当にいいまちになると思います。

(知 事)

別に観光じゃなくてもいいと思うのです。まず、暮らしている方々が第一ですから、そういうところで幸せを感じることはたくさんあると思うのです。

(國 兼)

あります。

(知 事)

それが暮らしている人たちにも十分知られていないということもあるかもしれないですけども。

(國 兼)

知られていないかもしれないです。

(知 事)

ありがとうございます。

もう一つお伺いしたいのですけれども、竹原の人口規模は3万人ちょうどぐらいなのです。それほど大きな市ではないのですけれども、こうやってお話をお伺いしていると、非常に多才な方々がたくさんいらっしゃるような気がして。元気な方とか、すごくいろいろなことに取り組んで、いろいろな人を巻き込んでやっていらっしゃる方が多いような感じがするのですけれども、その理由とか秘訣みたいなものは何かあるのでしょうか。どう思われますか。外に出られた方とか、Uターンされた方はよく分かるのではないかと思うのですけれども。どうですか。山田さんはUターン組でしたか。

(山 田)

Uターン組です。Uターンしてくると広島だとか竹原のよさというのが見えてきて、食べるもの、住むこと、小ぢんまりとして住みやすい場所だと思います。

先ほど町並み保存地区のこともありましたけれども、歴史、文化もあって、食べものも四季折々に旬なものが食べられるのです。そういうことも含めて、非常に住みよい場所だと本当に思います。

(知 事)

なるほど。それがもとだということですか。

(山 田)

そうですね。

(山 内)

実は私もUターン組なのですが、30年ぐらい前の我々が学生から社会人になるころと今の地域は比較にならないぐらい過疎化しています。だけど、私も毎月に近いぐらい、毎月以上に東京には行くのですけれども、非常に便利がいいです。車を乗り捨てて10時には向こうの会議に入れる。では、向こうに住むかと言ったら、今ではとてもではないが、こっちのほうがいいと思います。毎週、52週行っても、週末はこっちのほうがいいと思います。だから、住みよさは非常にあるのですけれども、経済のことを考えると、若い人たちは働く場所がない。しかも、広島県は戦前の海軍工廠の技術が自動車産業にあって、2兆円以上の出荷額があり、知事さんは通産省の御出身と聞いていますが、中国経済産業局の人と県の人と話をしても、数字がいいものだから皆さんマツダのほうしか見ていないですね。それ以外の危機感が低いといいますか、よその県など、僕は東京に行って、栃木、群馬、茨城、山梨、いろいろな地域を見ますと、あまりにも産業が偏っているので、そこそこ数字がいいということですが、マツダとか、名古屋もそうですけれどもトヨタが風邪を引いたらみんな肺炎になる。呼吸停止になる。そこら辺を考えたら、もちろん住みやすいという非常に重要なものがありますけれども、やっぱり産業も考えていかないと、若い人たちは難しいという感じがします。

(知 事)

そうですね。住みやすさというのは元気のベースになっているということですね。なかなかこというふうには、もちろんそういう話ではありませんけれども、同じような人口規模だとか、あるいは高齢化が進んでいる地域でも、雰囲気はいろいろあるのです。竹原というのは住みやすさを実感できる場所だということなのかもしれないですね。

(山 内)

海もありますし、温暖で、風光明媚で、自分たちは特に感じますけれども、よそから来た人もやっぱりいいところだなというのは言われますが、やはりまだ何か足りないという感じは否めないです。

(知 事)

おっしゃるような産業の面というのは、県としても決して手をこまねいて見ているわけではなくて、そうは言っても、自動車産業というのが非常に重要な産業であることに変わりはありませんので。例えばくしゃみをするとうつ病になってしまいますから。なるべくく

しゃみはしてもらわないように、強い体質になるようにしていかないとはいけませんし、それだけではない、いろいろな多様な力というのを集めていかなければいけないということで、いろいろな産業施策には取り組んでいきたいと思っています。

そういう中で、今年は産業振興ビジョンというのをちょうどつくる年になっていまして、今、議論を始めていますので、またその結果は今年度の後半にはお示しできるのではないかと思います。

残り時間もわずかになってきたのですけれども、特にこれを言うておきたいとか、これを聞きたいとかありますか。

(義 本)

先ほど時間がなくて端折ったのですけれども、私ども大久野島は毒ガス関連の遺跡でもありますので、観光資源というのとちょっと別かも分かりませんが、広島原爆ドームに匹敵するぐらいの忌まわしい過去があって、負の遺産と言われている部分があります。今、海底から毒ガス弾らしきものが見つかったとか、そういった不安もありますから、そういった不安を取り除いていただいて、なおかつそれを基に平和教育といいますか、平和の発信というところでは重要な位置だと思います。

悲しいかな、私の子どもの夏休みにどこかに遊びに行こうというような地図の中に大久野島が抜けていたのです。あちこち遊びに行きましょうという地図の中にです。休暇村を載せてくれというのではなくて、大久野島は広島県の中ではそれなりの位置だと思いますので、是非欠落することなく。

(知 事)

ごめんなさい。それは県が作った地図ですか。

(義 本)

発行元も書いていなかったもので、どこかに文句を言ってやろうと思ったのですが、文句の言いようもなかった。子どもが持って帰ったちゃんとした印刷物でした。その中に、竹原というところでは町並み保存地区しかなかったもので、大久野島というのは観光施設だけではなくて重要な位置だと思いますので、是非お忘れないようにしていただければと思います。平和の発信基地にもしたいと思っています。

(知 事)

分かりました。ありがとうございます。

(東)

先ほどUターンとかお話があったのですけれども、僕は出身が神戸です。三原の県立大学に行かせてもらって、医学療法士の免許をとって、三原市は隣町だったのですけれども、竹原市とは縁もゆかりもなかったのですが、私がこうして竹原市にいるということは、先ほど何回も言いましたけれどもやりたいことができる。その受け皿としてNPOがたまたまそこにあったというだけだと思うのですけれども、恐らく今の大学生、20代、30代ぐらいの人はある程度やりたいことができるという保障といたら変ですけれども、やりたいことができる環境があれば、起業家を育てて、そこで雇用を生み出す。僕らのマーケットはマツダみたいに大きくはない。マツダと言ってしまいましたが、県内全域ではなくても、竹原市内でいわゆるコミュニティービジネス、ソーシャルビジネスとしてやっていると。今、まちづくりとか学生の中でもブームになっているみたいですので、コミュニティービジネスとして若い世代、30代までの世代に提案させて、そこに有志という形になるかどうか分かりませんが、いわゆる起業家をサポートして、まちづくりの起業家です。各市町にそういう体制があれば、恐らくそこから起業家が生まれ、雇用が生まれ、そして、住む環境が生まれという流れになってくると思います。くしゃみではなくて、くしゃみをして隣の人にうつるぐらいのマーケットという言い方が正しいかどうか分かりませんが、地域主権というふうに先ほども言われていますので、ビジネスの観点からも、特にNPO所属ですのでそういう観点になるのですけれども、そういうことがあればいいと。そのモデルとして何ができるのかというのを今探っている状態です。

(知 事)

ありがとうございます。

(竹 安)

今、若い人の雇用と一生懸命言っているのですけれども、さっきも言いましたけれども私たち50歳という中途半端な時期になりますと、60歳になって退職になって、あと年金が、今の父や母のように十分に暮らしていけるだけはないと思うのです。年金がなくなるとは思いませんが、年金と、かつゆとりの収入ができるような、年配になってもできるような仕事があって、生きがいになって、8時間労働でなくてもいいので、その人その人で無理のないような、生きがいになるような、かつ、お金も使ってもらわなくてはいけなくて旅行にも行けるような、そういう働き場がほしいと思うのです。自分たちも年をとって、輝いて生活ができる年配になりたいと思います。それを見て若い人も、あそこだったら大丈夫、暮らしていける。父や母がいても、連れて行ってでも頑張れるというようなまちにしていきたいと思うので、そういう働き場を何とかできないか。近所のおばちゃんたちも、野菜はつくってあげるよ。でも、キャベツが10個できても、10個ではどうにもな

らんじやろうと言われるのです。私が走って行って、ここの家で10個、ここの家で10個、私一人で取りに行くことはできないのです。だから、東さんも今おっしゃられましたけれども、そういう人間、人材、そういう人をつくっていく。そういうことがとても小さなまち、小さな竹原市ですけれども、大きな力を竹原市が求めているのではないかと思うのです。何とかそういうことをしていただけないかと思います。

(知 事)

どの年代になっても人の役に立つというのはすごく生きがいになることなので、そういった観点も大事だと思いますし、少子高齢化というのはどういうことかということ、働き手がいなくなるということでもあるので、女性もそうなのですけれども、あるいは今は高齢者に分類されてしまっている65歳から75歳ぐらいの方、実際にはお元気な方がほとんどです。いかに社会に参画していただくかというのは大事な視点だと思います。

(竹 安)

よろしくお願いします。

(知 事)

ありがとうございます。

閉 会

(知 事)

それでは、時間も過ぎてしまったようなので、ここで閉会とさせていただきます。私から一言御挨拶をさせていただきます。

改めまして、今日はこの懇談会に御出席いただきまして本当にありがとうございました。いつも思うのですけれども、非常に多彩な意見、多様な意見、目からうろこの意見、あるいは耳の痛い意見、今日は耳の痛いことは比較的少なかったのですけれども、本当に感謝しております。

県という仕事は、今日のお話、たくさんの部分は市の取り組まれる事業でありますし、市とか県とかということももちろんあるのですけれども、私としては市がいかにそういった事業に取り組んでいくかということをサポートしていくのが県の仕事だとも思っています。これからも県市一体となって、広島県の皆さんが幸せに暮らしていただくということが一番大事なことだと思いますので、それに向けた取組みに励んでいきたいと思っております。

傍聴者の皆さん、2時間、しゃべっているほうはいいのですけれども、ずっと聞いているのはお疲れになるのではないかと思いますけれども、本当にありがとうございました。

今日は元気の出るお話がたくさんあったので、また皆さんも元気を受けとめられてお帰りになるのではないかと思います。また明日からも仕事ですけれども、みんなで頑張っていければと思います。今日は本当にありがとうございました。